世界の現在 「憶える学問」を忘れない

佐藤 仁
東京大学東洋文化研究所教授／プリンストン大学客員教授

大学における講義の方法にはトレンドがある。最近の流行りは、受動から能動へ。いわゆる「アクティブ・ラーニング」の推奨である。一方通行の講義ではなく、討論を通じて問題の発見能力を養うという。結構なことである。しかし、だからといって従来型の学習方法を十把一絡げに「受動的」として葬り去ってしまってよいのだろうか。

筆者近影

討論は確かに教室に活気をもたらすが、学びという意味で本当に身につくとは限らない。そんなことを「白熱教室」の本場、米国の名門・プリンストン大学で4年間教えてみて考えるようになった（詳しくは、拙著『教えてみた「米国トップ校」』角川新書を参照）。

米国東部のニュージャージー州に位置するプリンストン大学は、20世紀初頭に他の大学に先駆けて「プリセプト」と呼ばれる少人数の討論形式授業を取り入れた大学であった。ドイツ式のゼミナールをヒントに、教師と生徒の人間的な交流を重視した画期的な方法である。では、それ以前の時代、米国のトップ大学ではどのような授業が行われていたのだろう。

そのヒントを、明治維新直後の1870年から数年間、プリンストンに留学していた日本人留学生、折田彦市の日記に見つけた。折田彦市とは、のちに創設されたばかりの第三高等学校（京都大学の前身）の初代校長を務めた教育家である。漢文の素読と暗唱を基本的な学習方法にしていた折田のような明治期のエリートは、米国式の能動的な討論という方法に出くわし、さぞ面食らったのではないか。私は勝手にそんな想像をしていた。

ところが、折田の日記には、意外なことに、ひたすら講義内容を復唱の練習をする様子が描かれていた。資料によれば、ラテン語やギリシャ語といった語学科目で暗記・復唱は当時の米国の大学で一般的にとられていた授業方法であった。つまり、四書五経を徹底的に憶えてから留学した幕末・明治期の学生たちにとって、当時の米国における学習方法は違和感なく受け入れられた可能性がある。その時代、体をつかって「憶える学問」は洋の東西を問わず共通していたというわけだ。

それから時代は下り、今日の大学教育の現場では暗記や復唱はおろか、文献の輪読すら時代遅れとみなされるようになった。憶えるのではなく、発言を通じて授業に「参加」するスタイルが日本の教室でも定着しつつある。だが、教える側から見ると、課題文献すら体得できていない学生たちに「討論」させるのは苦痛ですらある。「参加点」を稼ごうと、課題を読んでいないのに討論術だけでその場をしのぐ傾向は米国でも見られる。討論を充実させるためには、討論の基礎になる知識を「憶える」という過程が先行しなくてはならないのだ。

この点で、討論するために憶えるのではなく、憶えるために討論している人たちがいるのを知ったときは新鮮であった。チベット仏教の修行僧のことだ。長尾雅人による著書『蒙古ラマ廟記』（中公文庫）は、彼らがテキストを何十年もかけて系統的に暗唱し、憶えたことの確からしさを問答形式で確認していく様子を生き生きと描く。暗誦できてしまうほど経典を討論し、やがてテキストと一体化するまでそれを実践するという方法は現在も行われている。日本

における仏教研究の第一人者であった長尾は、経典が何でも頭に入っている修行僧に出会い、その都度文献を探さないと討論できない自分の弱さを知った。

たしかに学問の場合は宗教とは異なり、決まった経典を繰り返し読むようなことはしない。それどころか、特定のテキストに対する無批判な権威付けを嫌う文化がある。だが、学問を過去の蓄積を生かした深いレベルにもっていくために、「これは忘れてはいけない」と思って文献に向かう姿勢は、対話や討論に先立って強調されるべきではないか。

ＩＴ万能時代に原始的にすら見える「憶える学問」の世界は、自分の体の中に知識をためることを忘れた現代人には特に示唆的だ。教室で手書きのノートをとる風景すら珍しくなり、ネットでキーワード検索すれば何か出てくるであろうという安心感から、私たちは体をつかって憶える力そのものを失いつつある。かつてアイヌの言葉を研究した金田一京助は、文字をもたないアイヌの人々がなぜ15代も前の先祖の名前を諳(そら)んじているのかに驚嘆し、彼らの「憶える意力」は文字をもたないからこそ鍛えられていると考えた。

学問における「憶える世界」は、何を憶える対象に選ぶかという判断に学ぶ側の主体性が入ってくる。決まった「経典」がないからである。だから、自分にとって「憶えるに値する文献」を探して、選び取り、自分のものにしなくてはならない。そう考えると、いっけん受動的な「憶える学問」にも能動的な可能性が見えてくる。成果が急がれるこの時代だからこそ、選び抜かれた文献を繰り返し読むという、かつて当たり前だった方法を思い出すべきではないか。体に染みついていない智は、すぐに剥がれて使い物にならなくなる。

「憶える学問」を忘れてはならない。

歴史からのメッセージ　漱石の松山

長島裕子　早稲田大学文学学術院非常勤講師

筆者近影

「漱石は松山をどう思っていたのでしょう」

昨年七月に対談の司会をしてくださった川島佳弘さんのことばにこめられた思いが、ひしひしと伝わってきた。「松山の漱石」については、その事跡が語られてきた。しかし、漱石にとって、松山はどのような土地であったのだろうか。

漱石が松山に住んだのは、愛媛県尋常中学校に在職した明治二十八年四月から二十九年四月までの一年間だった。それ以前には、帰郷中の子規を訪ね、明治二十五年八月に松山の地を踏んでいる。松山には、友がいて、その友の友がいて、温泉があった。

松山を離れ、熊本の五高に転任して十ヶ月余りが過ぎた明治三十年二月十七日、漱石は、村上霽月に宛てた手紙を、次のように書き起こしている。霽月村上半太郎は、この年、伊豫農業銀行を設立する若き実業家で、漱石にとっては、松山の俳句の友であった。

一陽春と相成候　屢道後の温泉の事抔思ひ出し閑暇もあらば今一度御面会旁入浴も致し度存居候へども何しろ遠方の事にて随意にもなりがたく閉口致候

坂の上の雲ミュージアム インフォメーション

●第12回企画展テーマ展示「明治青年 秋山真之」開催中

小説『坂の上の雲』に描かれた真之の人生を、海軍や家族に関わる資料をもとに紹介します。「明治」という時代を担った青年のひとり、秋山真之の歩みがひとつの時代の流れを感じ、考えるきっかけになればと願っています。

期間：平成30年2月27日（火）～平成31年2月17日（日）

【関連イベント】

第12回企画展開催記念シンポジウム

田中宏巳さん（防衛大学校名誉教授）、中野目徹さん（筑波大学教授）、木藤たかおさん（フリーアナウンサー）を招き、日本海軍の知将として知られる秋山真之の歩みを通じて、新時代人ともいえる明治の青年像、彼らの生き方に迫ります。

日時：平成30年3月21日（水・祝）13時30分～15時
場所：ミュージアム2階ホール
定員：100人（当日受付先着順）
料金：無料

●「3・11あの日を語り継ぐ2018」展

新聞『三陸新報』に掲載された、気仙沼市や南三陸町の方々が体験した震災とその後についてまとめた「あの日を語り継ぐ」という記事と、いまの気仙沼の様子を伝える記事を展示します。

日時：平成30年3月1日（木）～16日（金）
料金：無料

●第3回東日本大震災被災地復興記念コンサート

坊っちゃん劇場・元わらび座の畠山泉さんに東北地方の歌と踊りを披露していただきます。済美高校合唱部による合唱と震災教育活動報告、同校と交流している東陵高校（宮城県気仙沼市）の生徒代表による現況報告、三陸新報社からのメッセージなどもあります。

日時：平成30年3月11日（日）
場所：ミュージアム2階ホール
定員：100人（当日受付先着順）
料金：無料

●生誕150年記念 秋山真之祭2018

今年は秋山真之生誕150年の記念の年。当館において、様々なイベントをおこないます。

①秋山真之ゆかりの地を訪ねるフィールドミュージアムツアー

第12回企画展を観覧後、市内の秋山真之ゆかりの地を訪ねます。

日時：平成30年3月18日（日）9時30分～12時
場所：ミュージアムほか
定員：30人（予約制先着順）
料金：500円

②ブロックで「未来の松山の街」をつくろう

イヨココロザシ大学レゴ部の森さんを講師に招き、ブロックで未来の松山の街をつくります。

日時：平成30年3月24日（土）13時30分～15時
場所：ミュージアム2階ホール
定員：20人（中学生以下、予約制先着順）
料金：無料

③カフェコンサート

＊ロシアに音楽留学経験がある松山市出身のピアニスト池田慈さんによるコンサートをおこないます。

日時：平成30年3月24日（土）15時～16時30分
場所：ミュージアム2階カフェ
定員：40人（当日受付先着順）
料金：無料

＊真之が生きた時代の日本や外国の名曲を、ソプラノ歌手高橋映さん、ピアニスト垣生悠比子さん、サックス奏者横田典子さんの演奏でお届けします。

日時：平成30年3月25日（日）15時～16時30分
場所：ミュージアム2階カフェ
定員：40人（当日受付先着順）
料金：無料

④オリジナル☆マトリョーシカをつくろう

ロシアの民芸品「マトリョーシカ」に絵を描いて、自分だけのオリジナルマトリョーシカを作ります。

日時：平成30年3月25日（日）10時～12時
場所：ミュージアム2階ホール
定員：15組（予約制先着順）
料金：1000円

「小日本」坂の上の雲ミュージアム通信
第32号◎2018年向春号
発行日◎2018年2月28日
編集責任者◎松本啓治
発行所◎坂の上の雲ミュージアム
郵便番号 790-0001
松山市一番町三丁目20番地
電話 089-915-2600
FAX 089-915-3600
http://www.sakanouenokumomuseum.jp/
印刷製本◎株式会社明朗社
頒価◎一〇〇円